

杉山香織 (ボルドー第三大学派遣)

派遣期間：2012年9月12日～2013年7月31日

派遣の概要

本プログラムによる派遣の第一目標は、東京外国語大学の博士論文の完成にあった。報告者は2011年度より、派遣先であるボルドー第三大学へフランス政府給費奨学生として留学しており、本プログラムによる派遣は、ボルドー第三大学での第二年次に相当するものであった。ボルドー第三大学への入学の際、東京外国語大学との共同学位制度が認められなかったため、東京外国語大学の博士論文とボルドー第三大学の博士論文の2つを執筆することになっていた。東京外国語大学の指導教員である川口裕司教授と、ボルドー第三大学の指導教員である Laurence Labrune 准教授と報告者が相談した結果、まずは東京外国語大学の博士論文を終わらせることになった。東京外国語大学の博士論文のタイトルは「フランス語学習者の発話における使用語彙分析」である。これは、日本人フランス語学習者の発話とフランス語母語話者の発話との違いを、質的、量的観点から明らかにし、記述するというものである。

また、東京外国語大学の博士論文の執筆と平行し、ボルドー第三大学の博士論文に使用するデータの収集を行うことも、本派遣のもう一つの目標であった。ボルドー第三大学の博士論文では「フランス人日本語学習者の発話における使用語彙分析」について扱うため、フランス人日本語学習者の会話データを派遣期間中に収集することも行った。

派遣による研究の成果

報告者は派遣期間中である2013年5月に東京外国語大学の博士論文を完成させ、翌月6月に東京外国語大学へ提出をした。なお、最終試験は来る9月30日に行われることになっている。博士論文は計10章から構成されており、計376ページとなった。先行研究より、体系的に構築された日本人フランス語学習者話し言葉コーパスは存在しないことが分かったことから、フランス語学習者コーパスの構築から行い、そのコーパスを使用して、学習者の使用語彙について「語彙の豊かさ」、「特徴語」、「コロケーション」、「N-grams」という4つの観点から計量的そして質的な分析を行った。

派遣期間中は博士論文の完成を最優先としたため、博士論文の執筆活動が中心となったが、学会発表や投稿論文の執筆も積極的に行った。その結果、5つの学会発表と1つの論文の執筆を行うことができた。まず、2012年11月22日から24日にかけて、ドイツのヒルデスハイム大学で開催された国際セミナーに参加した。この国際セミナーでは、『Évolution des Études Basées sur les Corpus d'Apprenants (学習者コーパスに基づく研究の発展)』というタイトルで発表を行った。主に、コーパスとは何かという問いから出発し、コーパス以前とコーパス以後の中間言語研究手法の違い、コーパス言語学の歴史、語彙研究の概念や手法、そして博士論文でどのような研究を行っているのかの説明を行った。また、この発表を基として、国際セミナーの論集への論文の執筆も行った。2012年12月10日と11日には、パリで行わ

れた IPFC-PARIS¹という国際学会に参加した。『Comparaison de l'Usage des "Multi Word Units" entre les Apprenants Japonais du Français et les Francophones Natifs (日本人フランス語学習者とフランス語母語話者間における"Multi Word Units"の使用の比較)』というタイトルで発表を行った。これは、Log-likelihood (対数尤度比)という統計手法を用いて、学習者によって有意に過少使用される 2 語から 5 語までの MWUs を抽出し、分析をしたものである。2013 年 2 月 16 日には、パリで Troisième journée doctorale du CELIJA が開催され、そこで発表を行った²。『Les corpus d'apprenants, leur développement et leurs applications (学習者コーパス、その発展と応用)』というタイトルで、コーパス言語学の発展と、コーパスを用いた語彙習得研究の可能性について発表した。4 月 12 日には、ボルドー第三大学で行われた colloque estudiantin という言語学のマスターの学生が企画運営をする学会で発表を行った。この学会は指導教員の Laurence Labrune 先生が指揮をとっている学会でもある。『Les différences d'utilisation des pronoms personnels entre les débutants Japonais du français et les francophones natifs - analyse comparative basée sur les corpus (フランス語初級学習者と母語話者間に見られる人称代名詞の使用の差異-コーパスに基づく比較研究)』というタイトルで、日本語の人称代名詞主語の説明を行ってから、どのような人称代名詞主語が過剰使用されたり過少使用されたりするのかについて結果をまとめた。派遣期間中の最後の学会発表が、これまで行ってきた学会の中で一番大規模な国際学会であった。これは、6 月 6 日から 6 月 8 日までペルピニャンで開催された、Association of French Language Studies の学会である。初日には 『Différence dans l'Utilisation des Marqueurs Discursifs : Analyse Comparative entre Apprenants et Français Natifs (ディスコースマーカー使用における差異：学習者とフランス語母語話者間の比較分析)』というタイトルで発表を行った。本発表は、学習者による過少使用語のリストには、多くのディスコースマーカーが含まれていることに着眼し、特に *enfin, hein, quoi, bon, tu vois, tu sais, quand même, en fait* というディスコースマーカーの使用について、個人差が存在するのか、レベルによる使用頻度の差が見られるのかについて分析したものである。

また以上の他にも、ボルドー第三大学の博士論文に使用するデータ収集を行った。最終的には、1 年生から 3 年生の日本語専攻の学部生各 7 人と、修士以上で留学歴が 1 年以上ある学習者の 7 人の合計 28 名分の会話データ、およそ計 14 時間分の発話データを集めることができた。このことによって、学年ごとの語彙の習得の差を調べることや、留学経験の有無について比較することができると期待できる。今後このコーパスを使用し、東京外国語大学の博士論文で使用した手法を用いて、ボルドー第三大学の博士論文を執筆する。

今後の課題

今後、研究面と教育面と 2 つの面からの課題があると考えられる。研究面では博士論文で明らかになった学習者の問題点について、さらに研究を深めていくことが課題の一つである。特に、日本人フランス語学習者に顕著であったディスコースマーカーの過少使用やフランス語の口語表現に特徴的な語句の過少使用について、その原因を追求し、教育に還元することが急務であるといえる。なぜなら、ディスコース

¹ <http://cbllle.tufs.ac.jp/ipfc/>

² <https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=ZGVmYXVsdGRvbWVpbnxjZWx pamFmcnxneDo1N2RlZTNmYmY5ZWJiNzEx>

マーカ―や口語表現は、コミュニケーション遂行のためには必須であるのにも関わらず、学習者によるこれらの使用についてはあまり研究が行われておらず、教育現場においても積極的に取り上げられてこなかったからである。また、これらの研究に平行して2つ目の博士論文を完成させることも、課題として残っている。

教育面では、研究と教育の連携と融合が今後の課題であると考えている。これまでは学習者言語の分析を行ってきたが、研究活動の最終目的は研究結果を教育へ応用させることである。研究で明らかになった日本人フランス語学習者の問題点を、学習者に明示的に指導することで、研究結果を教育現場へ還元していきたい。また、フランス語の研究を通して身に付けてきたフランス語に関する知識を伝えていくことは言うまでもなく、留学生活から得た経験を基に、フランス語圏の社会や文化について学生に伝えていくことも今後の課題の一つである。教室活動ではなかなか知ることのできないフランス語圏の実情について、長期滞在経験者の生の声を伝えていきたい。フランス語圏の国々と日本との橋渡しができるよう、努めていきたい。